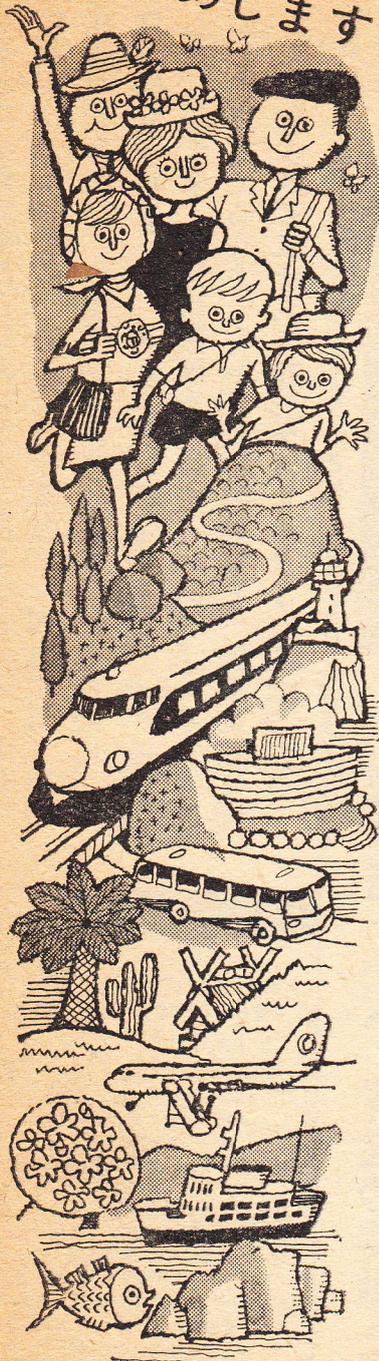


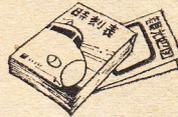
1966. 4/2 号

おすすめします



春から初夏への 旅行プラン

いよいよ旅行シーズンですね
ご家族で グループで お出かけになる
チャンスです
数多い交通公社の特選コースの中からい
くつかをご紹介します



《日帰り～1泊の旅行》

- 新幹線ハイセット旅行
(毎日出発 東京/名古屋/大阪から71コース)
- ファミリーセット旅行
(毎日出発 東京/名古屋/大阪から32コース)
- よい子のハイウェイ・ドライブ
(毎日曜日・祝日出発 東京から)
- カーネーション旅行
(5/8 出発 東京から)
- 週末1泊旅行
(毎週末出発 大阪から8コース)

《2泊～4泊の旅行》

- 春の山陰路へ空の旅
(5/2・5/6 出発 東京から)
- 志賀高原の旅
(5/3 出発 名古屋から)
- 東北スリーラインの旅
(5/7 出発 名古屋から)
- 徳之島と佐多岬への旅
(5/6・5/28・5/30・5/31 出発 大阪から)
- 南九州バラエティ旅行
(5/16・5/28・5/29・5/30・5/31・5/31 出発 大阪から)

お申し込みはお早めに お近くの交通公社へ

ご出発の安心感 お帰りの満足感
日本交通公社

五十人の覚悟

ル花形職業の敗戦



職員はクビ切りにそなえ目下ハチ巻で闘争態勢

ついに来るところまで来たといえようか。開局以来、赤字経営を続けてきた東京12チャンネル。去る三月十五日、「四月以降、いっさい商業放送はやらない」「通信制工業高校向け番組を中心に、一日の放映は五時間半にする」「余剰人員二百名の整理」という再建案を発表した。組合は「死活の問題をかけて」「一戦交える構え。だが「民放にして民放にあらず」というこの再建案で、完全に宙に浮いたのは百五十人の花形ディレクターたちだった。

「使い道がない」現代の英雄たち

ディレクターたちは、困惑しきっている。たとえば、歌謡番組担当の工藤忠義ディレクター。「科学教育局に流行歌」の取合せの妙は別として、ともかく、平均二・七割の低視聴率を、なんとか持ち上げんものと、再建案発表の前日まで「悪戦苦闘」をしていたのである。「なにしろ、こ

としにはいつて、寄席番組も、週二本出てきた。芸能スポーツショーも広げる傾向にあった。そこで、ぼくなんか、つい最近の番組で、三田明を使ってうたってすべろう青春」というのを作っただけです。これは、ぼく自身、カメラのR社やレコードのV社を駆けめぐって、スポンサーになってもらったんです。現場の空気は、むしろ、局員総セールスで、四月からの新年度目ざし、制作費が安くて視聴率の高いものを準備していこうとしていたのです。上から伝わるニュースは、みんなこの方向だったですよ。ぼくなんか、それにすっかりおだてられてやってきたわけですね」

そんな苦心も、いまや水の阿ワ、というのである。そして発表された再建案は——一日五時間半の放映も、その実は、三時間がすでに制作済みの通信制工高向け番組。あとの二時間半も、三十分がニュースで、一時間が再放送番組（映画が中心）。実際に制作が許されるのは、わずかに一時間というのである。これでは仮にクビにならないとしても、仕事らしい仕事はなくなってしまうではないか。こんどの再建案で完全に姿を消すドラマの担当の、ある第一線級のディレクターはいう。

「二十二か三で、大学を出て、五年間はどこでもアシスタント・ディレクター、二十八歳で一

ふたりだけのないしょ話

★妊娠中絶をさけて結婚したその日から

見本無代進呈
ハガキ一枚で、誰にもわからないように見本と説明書をお送りします。

もう、スキンという時代は終わりました。これからは、コートと呼んで下さい。ゼリアコートは、JIS規格品のコンドームにゼリーを塗ってありますので……

- 自然—ゴムの異物感が少く、いい感じ
- 簡単—タタはめるだけで手軽にムード満喫
- 安心—全品電気試験検査済ですので安心してご使用できます

(薬局・百貨店で品切れの際は直接お申込みを干無料)
ゼリーを塗ったコンドームPAT. NO. 55505

＜類似品にご注意下さい＞

ゼリアコート

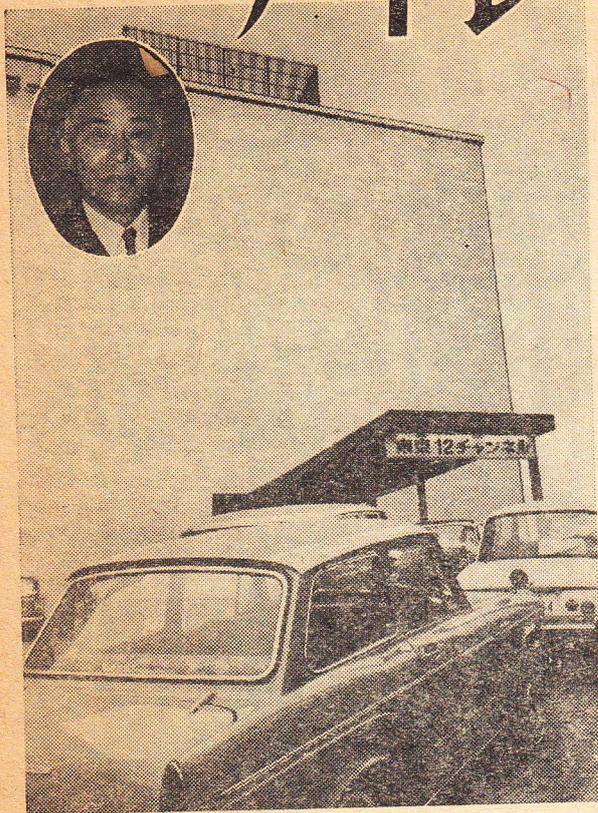
定価／一打 ¥250・¥300・¥500・¥1000
ゼリアコートセブン ¥250・¥300・¥500

日本ゼリア株式会社 (週新係)
大阪市東区徳井町 1-23

東京12チャンネル
は本当にどこへ行
く
(円内・倉田主税会長)

百タグラディ

東京12チャンネル



本立ちとなり、それからの十年間が、ぼくらの商売では油のりきった仕事をする、といわれているんです。ウチの場合でも、一線級はすべて三十三、四から三十七、八までの人です。その、いまが花というときに仕事がなくなくなるすからねえ、なにか人生がなくなったという感じなんですよ」

では、もしもやめたとしたらどうなるか。東京12チャンネルでは、もつとも高い視聴率を集めていた『ゴールデン・ポップス・コンサート』担当の黒沼昭久氏は、つぎのようにいう。

「もし、12チャンネルをはなれることになる、ディレクターというのは、使い道がありません。記者なんかと違ってモノは書けないし、ほかの局へ行こうにも、どこも人減らしをしたところだから、はいるうにもはいれない。アメリカあたりなら、さしずめ、フリーのディレクターになるところだが、日本には、そんなのないから、まず

甘かったその出発

東京12チャンネルが、はなば

できない。すでにテレビ界をやっていった先輩たちには、広告代理店のサラリーマンや芸能プロダクションのマネジャーになった人が多いですよ」

さる世論調査によると、若い女性の間では「テレビ・ディレクター」が、もつとも人気のある男性の職業だったそうである。彼女たちの評価では「仕事に創造的」で、「時代の先端を

行く芸術家」、そして「スマートで個性的な男性像が、そこにはある」ということだった。12チャンネルのディレクター百五十人にとっては、「去るも地獄、残るも地獄」というのである。

では、開局から、この二年間に、彼らは破局を避けることができなかったのか。

なしく開局したのは、昭和三十九年四月のことである。会長に日立の倉田主税氏。専務理事に電源開発公団（秘書課）から来た津野田知重氏。津野田氏の前身は陸大卒の元大本営参謀で、財界の知名度は必ずしも高くはなかったが、敗戦後、占領軍の管理下にあった12チャンネルの電波を、アメリカまで渡って取り戻した手腕が、倉田氏に大いに買われたものらしい。

そして、事実、津野田氏は、その経歴にふさわしい「怪腕」をふるった。財界の大手二百社を説いて、12チャンネルの協力会社になるよう頼んでまわり、毎月各社一口五十万円の協力資金を、何口かずつ出させる約束を取りつけたのである。そこで

倉田―津野田のコンビは、声高らかに宣言した。いわく「視聴率は問題にしない」。またいわく「科学教育関係の硬派番組を七五割放映していく」。そして最後を「世界で初めての試み」としめくくった。

が、いざ開局してみると、はじめの目算は全くずれだった。二百の会社が名前をならべたのが、倉田氏への単なるお付合いのつもりだったのかどうかは分からない。また、津野田氏が免許をとるために舌先三寸で名前だけを集めたのかどうかも分からないが、ともかく、折からの不況も手伝って、一十月一億集まるはずの協力会費が、たったの七百万円しか集まらなかったのである。

それに輪をかけたのが、低い視聴率。いくら硬派番組専門局といっても、視聴率ゼロが軒なみというのだからお話にならない。そこで、編成はあわてて、娯楽化路線を打ち出し、『ゴールデン劇場』などの番組をヒネリ出した。八時から九時までの一時間を、一週間ぶつづけの毎週連続ドラマでうずめ、他局の視聴者をそっくりいだこうというナイイである。しかし、これも失敗した。作品の出来は必ずしも悪くはなかったが、既設局のゴールデン番組に割り込むのは容易ではなく、もともとこの壮挙、初めからムリだったのである。

上層部の方針が、こんなわけだから、下部の揺れがはげしかったのは、当り前だろう。あるディレクターの述懐によれば、「明日の仕事は、明日、会社へ行ってみないことには分からない」という気持の毎日だった」という。そして、その揺れの影響をもっともひどく受けたのが、営業部だった。なにしろ、最近の数字でも平均二・七割の視聴率。当時はゼロから一・五割までの番組がザラだったから、営

十一月になると、二度目のピンチに見舞われた。依然として低い視聴率、そして番組が売れないため、はやくも金融機関から五億円にのぼる特別融資を受けなければならぬハメに陥った。が、それから一ヶ月して就任した猪狩則男・現総務局長によると、そうした表面上のバランスシートとは別に、危機は内部でも進行していたようだ。「ぼくは就任してすぐ、『各番組の原価計算をやろう』と提案した。すると、『マスコミに原価計算とは……』と笑われた。津野田さんは、たしかに開局の親だったが、彼は経営者ではなかった。バランスシートも、

「ぼくが営業を引き受けたのは、去年からだけど、正直いって、一・五割の番組をどう売ったらよいか、ハッキリ分からなかった。少なくとも、マスコミ商品を売っているスポンサーは、この数字では付きっこない。そこで考えたのが、もう一つのサイフをネラうことだっ

オレは表面しか分からん」というし、周囲がゴマをすると、それにのって意味のない機構の拡大やら人事抜てきをやっていった。ぼくは、これでは一筋ナワでいかな、と直感した。むろん、猪狩局長の見方には局内にも異論はある。しかし佐々木六郎制作局長にいわせて「財団法人というのは、寄付行為でやるだけに、どうしても『親方日の丸』になる。つまり、責任の所在がハッキリしないんだ。どうしても考えが甘くなるんだ」というように、どうやら、12チャンネルは、出発早々から浮足立っていたのである。

た。つまり、企業イメージを上げようと考えている企業なら、買ってくれるだろうということ。その点で、ウチの営業部員は、ほんとに働いたです。夜討ち朝駆けでねえ。交際費もないから、盆、暮のつけ届けは、営業部員が自腹を切っして、個人名で相手方に贈りました。それでも居留守を使われたりしたですねえ。広告代理店の某氏などは、冗談に「新入社員教育には、自衛隊へ入隊させる

異端分子の寄合い所帯

こともさることながら、12チャンネルの営業に入れたらいいなあ、なんていいましたぐらいですよ」

林部長にすれば、「まだまだ努力は足りなかった」とはいうものの、月間一億円の番組売上げ、千五百万円のスポット料金は、「スポンサーの好意を別にすれば」こんな努力のうえに築かれたものといいたげである。

が、スポンサーの側から見れば、その努力も、いささか有難迷惑だったらしい。たとえば二百社の協力会社だが、協力会費は、社内からの批判がはげしいので出すわけに行かず、その穴埋めに、「スポンサー」を買って出ること格好をつけた会社も少なくなかったのである。某社の宣伝部の話では「それだっ

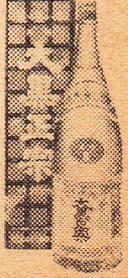
て、同じ料金なら他局のを買いたいのですが、社長命令では、どうしようもありません。損を承知で、社長命令が下るわけですからね。ウチのほうの社員にとっては、社員教育という点で、決していい影響を与えませんでしたよ」

おまけに、局員の質にも問題があったと思われる。あるディレクターの分析では、12チャンネルに来た制作スタッフは、大別して、「この機会に東京へ行く」という地方局出身の一発組。「12チャンネルの給料の低うがいいから」という、サラリーマンスタイルの人。それに「金か女で失敗したか、あるいは組合運動で左遷されていた」と、つまり「既設局のワクからハミ出していた異端分子」だったという。

春の
ご行楽に……
離の生一本

大黒正宗

灘安福又四郎商店醸



電波を国民に返せ

のような津野田氏の空中樓閣劇だったのではないか、というのである。つまり、財界二百社が津野田氏の「口車」に乗ったというのだが、津野田氏は、それを聞いて憤然とする。

「わたしが、みんなをダメにしたもなんも、あの仕事は、みんなが協力するというので始まったんだからねえ。そして、わたしも倉田も、一生懸命やったんだよ。それがこうなると、上も

下も、わたしを悪人扱いにするんだなあ。私腹を肥やしたなんてとんでもない。わたし自身クビ切り第一号になったんだよ。三月十五日に財団の専務理事をやめさせられたんだからね。このところ、毎日、財団に退職金を早く出してくれといっているよなわけです。こんどの再建案だって、ぼくは、つくられる過程は、ずっとツンボサジキに置かれていたんです。そして

でき上がったところで見せられたら、クビ切りだ。ぼくは反対したんだ。血も涙もないやり方だからねえ。だから、ぼくは何回も抗議したんだ。そして、ぼく自身、「おまえがいると、財界にとって都合が悪い」といわれ、やめさせられたんだよ」

津野田氏は、もし「陰謀」があったとすれば、その立役者は「財界」の人たちだといわんばかりである。

放送の中止で失われる営業収入を、この一億でまかなってやろうという算段だ。とするなら、なぜその一億の金が、二年まえに出なかったのか。猪狩局長ならずとも、「分らない話」である。監督官庁、放送作家、そして電波審議会会長が、それぞれ立場で、つぎのように結んだ。

では、テレビ・ディレクターたちは、この隠されたドラマをどう見ていたのだろうか。12チャンネルは、おかれて出発したテレビ・ステーションだ。先発局を追い越すためには、後発局は、よほどの努力が必要だし、そのうえ、おのれの実力も知り、置かれている条件も正確に測っていなければならぬ。とて刀打ちできないはずである。

が、残念ながら、そこまで見通していたディレクターは少なかったようである。副部長クラスのあるディレクターは、「あれだけ一流会社の名が並んでいるので、まさか、こんなことになるとは思わなかった。いまにして甘かったと思います」

「と反省する。そして、その目を曇らせたのは「視聴率を問題にしない理想的なテレビ局という出発当初の『大義名分』を百パーセント信用していたし、むしろやりがいがあると喜んでいた」というわけで、科学技術振興の担当者たちにしては、あまりに「非科学的」だったといえるが、大方のディレクターは、ひたすら社運を盛り返そうとハッスルしていたのである。

再び、工藤ディレクターの話。「制作費用を安くあげるため、一本のビデオテープを何回も流しましたよ。橋幸夫ショーなんか、前後六回も流しました。さすがに七回目はいよいよテープがすり切れてやれませんでした

ね。しかし局の態度は、そんなことに、いっこうおかまなしでした。なにしろ、橋幸夫ショーは、冬とつたのですが、冬の着物の橋君が、夏にも登場したため、視聴者からは投書がやってきました。当然ですよ」

これ以上、過去を追う必要はあるまい。問題は、これからである。提出された再建案は、はたしてどうなのか。けれども、驚くべきことに、12チャンネル内で、この問いに答えられる幹部はいない。猪狩局長も「ぼくには分からないですよ」

なぜなら、財界は今後、月に一億の金を出資するという。新しい再建案では、12チャンネルの一月の予算が一億円。商業

放送の中止で失われる営業収入を、この一億でまかなってやろうという算段だ。とするなら、なぜその一億の金が、二年まえに出なかったのか。猪狩局長ならずとも、「分らない話」である。監督官庁、放送作家、そして電波審議会会長が、それぞれ立場で、つぎのように結んだ。

「本来の科学教育の姿になるのだから、その意味では監督官庁としては歓迎だけれど、国民の電波が、特定層だけを対象に利用されてよいのか——これは研究課題ですね。それに通信教育というのは、あくまで添削と試験とスクーリングが三本の柱で、テレビは、独学自習の補助手段にすぎない。したがって、テレビがないからといって、重大な支障もないですよ」(郵政省電波監理局・松沢経人業務課長補佐)

「日本の財界なんていうのも、結局は風呂屋のオヤジと同じだね。客の入りが少ないと、自分たちのつくった組合費も出さないというふうなもんですよ。だから、12チャンネルを終わりにするのなら、財界のえらい人が出てきて、いまままで財界人な

どといばって来たけど、じつはあわれな中小企業の親父でして、君たちに思いちがいをさせていたのは申しわけない。どうか今後はいっさいケイベツして下さい」と視聴者にも従業員にもあやまるべきだな」(放送作家・梅田晴夫氏)

「もし、免許をとるとき、その必要から協力会社があり、金そこから集まるようなことをいってとしたら、それは見せ金でなんかやるのと同じですね。そういうのでは、やはり電波は一度返させたほうがいいかもしれませぬ」(沢沢秀雄氏)

タクシートの免許は、一度おりると取り上げられることはないので、12チャンネルをにぎっている人びと、あるいは、テレビもタクシーも同じに見えたというのだろうか。

歯の整形

◎反対咬合(受け口)	◎上顎前突(出っ歯)
◎歯列不正(乱杭歯)	◎醜悪な歯並び
◎自然歯矯正	◎整形補綴
◎歯のマニキュア	◎即日整形

東京都新宿区四谷三丁目四番地15電(341)2924
(地下鉄、都電、バス 四谷三丁目下車富士銀行斜め前)

最新歯科美容整形研究所

日祭平常通り 火曜のみ休み・午前9時～午後7時
所長・医学博士 亀山孝一

「歯の整形」の一切を網羅し一般読者のため豊富なカラー写真によって説明した特製本 ¥1000円 ¥100直接お申し込み下さい